

神奈川県立歴史博物館 平成20年度特別展

神奈川開港・開国150周年メモリアルイベント

横浜開港150周年記念

こ せ だ

五姓田のすべて—近代絵画への架け橋—**企 画 書**

今から150年ほど前、日本は海外諸国とより深く交流することへ方針転換しました。社会全体が大きな変化を迎える中で、美術もまた大きく変転していきます。そもそも今でいう「美術」が成立する以前の環境で、当時最先端の西洋絵画を技術として受容し、肖像画など主に外国人向けの土産品を制作することを職業とした絵師集団がありました。それが五姓田派です。

小さな工房として出発した彼らですが、次第に洋画を学ぶための大きな集団となりました。始祖である初代芳柳や義松、あるいは二世芳柳、山本芳翠などの弟子たちは、明治美術の広い分野で活躍しました。また、図画教師として西洋絵画技術の普及に力を注いだ弟子が多かった点も特徴的です。近代絵画への架け橋——日本画と洋画、絵画と写真、絵師と画家、あるいは工房と画塾、技術と美術——彼らの活動からは、流転する時代を先駆けようという情熱が感じられます。

本特別展は、五姓田派の全貌を紹介する初めての展覧会です。初公開・新発見を含めた250件・400点ほどの作品を通じて、謎の多かった彼らの全体像を明らかにし、新しい明治洋画史を編んでみたいと思います。



五姓田義松《自画像》 明治8年頃
神奈川県立歴史博物館蔵

会場：神奈川県立歴史博物館

〒231-0006 神奈川県横浜市中区南仲通5-60

Tel: 045-201-0926 Fax: 045-201-7364 URL: <http://ch.kanagawa-museum.jp>**会期：2008年8月9日（土）～9月28日（日）**

前期：8月9日（土）～8月31日（日） 後期：9月6日（土）～9月28日（日）

開館時間：午前9時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）

ただし、会期中の毎週金曜日は午後8時まで開館（入館は午後7時30分まで）

休館日：毎週月曜日（9月15日は開館）・展示替え期間（9月1日～5日）

観覧料：一般800円（700円） 20歳未満・学生500円（400円）

※（ ）内は20名以上の団体料金。

※高校生以下・65才以上・障害者手帳をお持ちの方は無料。

※前期をご観覧頂いた方は、観覧済みのチケットをご呈示いただくと、後期観覧料を団体料金に割引いたします。

主催：神奈川県立歴史博物館 岡山県立美術館

助成：財団法人地域創造

協力：財団法人ポーラ美術振興財団 東京藝術大学大学美術館

後援：神奈川新聞社 朝日新聞横浜総局 毎日新聞横浜支局 読売新聞社横浜支局 産経新聞社横浜総局

東京新聞横浜支局 日本経済新聞社横浜支局 NHK横浜放送局 tvk（テレビ神奈川）（財）横浜開港150周年協会

〇お問い合わせ 神奈川県立歴史博物館

Tel: 045-201-0926 Fax: 045-201-7364

I 五姓田派誕生

五姓田派が誕生する契機は、始祖である初代芳柳（しょだいほうりゅう・1827-1892）の登場によります。

初代芳柳の修業時代は今でも明らかとなりませんが、ようやく明治に入る頃から、作品が確認されます。絹地にぼかしを多用する、いわゆる横浜絵を大量に制作したと考えられます。そして明治天皇の肖像を代表として、数多くの肖像を描くありようは、職業絵師そのものです。職業としての絵画制作、その基本精神が五姓田派を貫きます。

一方で、本格的な西洋絵画技術を求め、英国人報道記者チャールズ・ワーグマン（1831-1891）のもとに、息子義松を入門させます。ワーグマンが伝えた即興で民衆の姿や風景を把握する力、報道記者としての感覚もまた、五姓田派に共有される一つの特徴といえます。



初代五姓田芳柳
《六美人図》 第六図
制作年不詳
郡山市立美術館蔵



五姓田義松《根岸友山像》 明治12年
個人蔵



初代五姓田芳柳《新潟萬代橋図》 明治21年
新潟市歴史博物館蔵



渡辺幽香《幼児図》
明治26年
横浜美術館蔵

II 五姓田家の絵師たち

五姓田派の拡大は、ひとえに義松（よしまつ・1855-1915）の成長とともにありました。十代半ばには基礎的な鉛筆デッサンや水彩画技法、また油彩画技術を習得しました。その技量をもって皇室や政府の仕事をつとめ、五姓田の名を轟かせていました。その周りに弟子たちが集まり、彼の技術を体験する中で学び取っていったと考えられます。パリ留学の帰国後は目立った活動は少ないのですが、円熟した技量を示す作品はその成果の一つです。

そして妹の幽香（ゆうこう・本名勇・1856-1942）もまた、兄義松に多くを学びました。幽香の作品の中には、義松をも凌駕する技術の高さを見ることができます。女性が絵師として、画家として生きることが難しかった時代に、真剣に絵画と向き合った姿が彷彿とされます。

Ⅲ 五姓田派を支えた絵師たち

初代芳柳や義松のもとには、西洋絵画の技術を学ぼうと、数多くの若者が集い、横浜や東京で学びました。

芳柳号を継承した二世芳柳（にせいほうりゅう・1864-1943）は、その継承に相応しく、日本画・油彩画を巧みに描きました。また五姓田派という枠をも飛び越え、山本芳翠（やまもとほうすい・1850-1906）は明治美術会から白馬会へと、明治洋画の大きな流れをつくりました。

初代の娘婿である渡辺文三郎（わたなべぶんざぶろう・1853-1943）は、中等教育に尽力しました。その文三郎も含め、『明治初期洋画壇回顧』の著者である平木政次（ひらきまさつぐ・1859-1943）や、明治期の関西洋画壇をリードした松原三五郎（まつばらさんごろう・1864-1946）など、岡山出身の弟子たちが多いことも特徴的です。



二世五姓田芳柳《国府台風景図屏風》右隻 明治15年
神奈川県立歴史博物館蔵



ひじかた
土方 力三郎
明治 18 年頃
《近藤勇肖像》
小島資料館蔵



五姓田義松《東京近傍写景法範》明治7年
町田市立国際版画美術館寄託



松原三五郎《小学錬画帖》卷之十二 第十二図・表紙 明治20年
サクラクレパス 西村四郎氏蔵

Ⅳ 拡散する五姓田派

五姓田派が登場し、その西洋絵画技術を伝える方法として、二つの大きな道があったと考えられます。一つが複製技術を利用した版画・挿絵など、もう一つが美術教育です。

彼らが制作した版画類の大部分は、石版画でした。石版画もまた西洋絵画技術の一つと位置付けられますが、五姓田に学んだ弟子の中には石版画工として勤めた者もいました。そして、明治半ばに活動した図画教師の多くが、実は五姓田に学んだ弟子たちでした。五姓田で学んだ技術が、全国の小等・中等教育を支えていたのです。その授業の具体相を、教科書の中に探ります。

五姓田派は単に芸術に邁進したのではなく、大衆を意識して様々な分野で広く活動していたのです。